

新生児期・乳児期用文章完成法検査 (SCT-NKS・IKS)による母子関係(2)

—母親自身のこと、父子関係項目について—

恒次欽也¹⁾ 庄司順一²⁾ 川井 尚³⁾

1. はじめに

母子関係や親子関係の発達、形成の起点は発達研究の初期の頃とは異なり、こんにちでは周産期からと考えられている。こうした観点からの研究も数多く発表されるようになってきた¹⁾。それと同時にいわゆる Maternity Blues⁸⁾への関心が近年高くなり、調査的事例的検討がさまざまに試みられてきている⁵⁾⁷⁾¹²⁾。また、Maternity Bluesの特集が組まれるようになってきている¹²⁾。一例をあげると、岡野禎治ら(1986)によると、1968年から1981年までの14年間に三重大精神科受診の産後精神病の発病時期は産後1週間前後に発病する早発群と、産後1～2カ月に発病する遅発群とがあつて病後も異なっているという⁷⁾。

Gard, P.R. ら(1986)は出産後に blues になったものとならなかったものを生化学的、心理社会的、医学的変数を説明変数とした判別分析を行った。それによると出産回数が判別に寄与するところが大きであると報告している¹⁾。

われわれは妊娠期の妊婦の心理を検討するために川井尚、庄司順一により開発された妊婦用文章完成法検査(SCT-PKS)をもちいて一連の分析を試みてきた^{3)9)13)～15)}。その中で注目されるのは対象となった妊婦の年齢、出産経験、流産体験などがSCTの回答に及ぼす影響であつた。とりわけ、出産経験では初産婦は胎児への期待感や妊娠したことに対する正の強い感動と同時に出産への強い不安感が特徴的であつた。他方経産婦では家事や身体の辛さを訴える傾向があり、妊娠がもたらす現実的な問題への対応に関心が集中しているといったように出産経験の違いが顕著に現れた。

これに引き続いて新生児期と乳児期の親子関係を検討する為にSCT-NKS(新生児期用文章完成法検査、以下NKS)、SCT-IKS(乳児期用文章完成法検査、以下IKS)が開発された(川井

1) 愛知教育大学特殊教育教室(障害児治療教育センター兼任)

2) 都立母子保健院

3) 東京都精神医学総合研究所

庄司)⁴⁾¹⁰⁾ 筆者はこれを用いて産褥直後（出産後約7日）にSCT-NKSを実施してから、産後約9ヶ月後にSCT-IKSを同じ対象者に実施できた資料を分析して妊娠期と同様に出産経験がもたらす影響について検討を行った¹⁸⁾。この検討ではSCTの質問項目の中から母子関係に関わる項目でしかもIKSとNKS両方に共通するものだけを抜きだしてそれぞれごとに外的基準を出産経験においた数量化第Ⅱ類による判別分析を行った。その結果、産褥直後でも、9ヶ月後でも同じように出産経験による相違が明かであった。すなわち初産群では感情的な反応の色彩が濃いが、経産群では直面する現実的な課題や問題への反応といった傾向が認められた。こうした違いは上に述べた妊娠期のそれと重なるあるいは引きずったものと考えられるであろう。このように妊娠期から産後9ヶ月に至るまで出産経験の有無が胎児との関係、母と産まれてきた子どもとの関係、各々への意識の形成に大きな影響をもたらしていることが分かった。

そこで、こうした傾向がSCTのほかの領域でも同じように出現するのかどうかを検討したい。今回は母親自身に関することと、父子関係の2領域を取り上げることにした。

従って目的は、産褥直後と出産から9ヶ月後それぞれの時期にNKS、IKSを同じ母親達に実施できた資料を用いて「母親自身に関すること」と、「父子関係」の両領域に出産経験（判別の為の外的基準）が与える影響について数量化第Ⅱ類による判別分析を行うことである。なお、ここでいう父子関係は妻側からみた夫と子どもとの関係である。

2. 方 法

(1) 研究の対象者

NKSは都立母子保健院産科で出産した母親に退院の一日前に回答を求めた。実施総数は521名であった。このときの新生児の平均日齢は7.18日（SD1.20日）である。このNKSを実施してから約9ヶ月後にIKSを郵送で配布し、回収した。これによって166名分の資料を得ることができた。IKS実施時点の乳児の平均月齢は9.26ヶ月（SD1.01ヶ月）である。今回の分析は上述した166名の中から資料の完備した143名分に関して行った。

この母親達のおおよそのプロフィールは年齢20～24歳15名（10.5%）、25～29歳71名（49.7%）、30～34歳47名（32.9%）、35歳以上10名（7%）であった。平均年齢は29.5歳（SD1.20）である。流産の経験があるものは（自然・人工両方を含む）21.7%、仕事をしているもの19.6%、核家族世帯が81.1%であった。乳児の出生時体重は平均3289.1g（SD351.12g）であり、男児80名（48.2%）、女児83名（50.0%）、不明3名（1.8%）である。母乳栄養83.9%、混合栄養14.7%である。さらに判別の為の外的基準に設定した出産経験は初産群が63名（44.1%）、経産群が65名（45.5%）、不明が15名（10.4%）であった。

(2) 検査内容と実施方法

回答方法は従来のSCT法とまったく同じである。

NKSは新生児期（生後1週間前後）の母親の妊娠、出産、乳児への意識（母子関係）、父子関係、

母親自身のことを文章完成法検査の手法を用いて探求するために、開発されたものである。質問は Table 1 に示したように 12 項目である。これらは予め 3 つの領域に分類してあり、領域 I 母子関係、領域 II 母親自身のこと、領域 III 父子関係である。この各項目に回答後、フェイス・シートにも回答するように求めた。

Table 1 SCT-NKS 質問項目

I K S (Table 2 参照) は乳児期 (生後 9 ヶ月から 12 ヶ月) の母子関係、父子関係、母親自身のことを N K S と同じ手法を用いて検討するために開発された質問項目数は 23 でその領域は N K S と同じである。

また、はじめに述べたように母親の出産経験の相違が新生児期と乳児期とでどのような影響を与えるのかを目的にしている。それを領域 II の「母親自身のこと」と領域 III の「父子関係」の 2 つの側面から検討することにした。この目的に沿って N K S, I K S 両検査に同一ないしは類似した項目を選択した。

その項目間の対応関係は Table 3 のとおりである。上段が N K S, 下段が I K S である。

1. はじめて赤ちゃん会ったとき私は (領 I)
2. 出産 (領 I)
3. 赤ちゃんが泣くとき (領 I)
4. はじめて赤ちゃん会ったとき夫は (領 III)
5. 乳房 (領 II)
6. はじめて赤ちゃん抱いたとき私は (領 I)
7. 赤ちゃんが生まれて、夫のかわったことは (領 III)
8. 心配なことは (領 II)
9. おっぱいをあげたとき私は (領 I)
10. 私が泣きたくなるのは (領 II)
11. 赤ちゃんが生まれて、私のかわったことは (領 I)
12. 赤ちゃんといると私は (領 I)

Table 2 SCT-IKS の質問項目

1. 私は、子どもの頃 (領 II)	2. 子どもがいると、私は (領 I)
3. 子どもの表情 (領 I)	4. 出産 (領 I)
5. 夫と子どもは (領 III)	6. 子どもは、こわいとき (領 I)
7. 妊娠に気づいたとき、私は (領 I)	8. 私は子どもと (領 I)
9. 私は女として (領 II)	10. 子どもが生まれて、夫のかわったことは (領 III)
11. 困りはてたとき、私は (領 II)	12. おなかの赤ちゃんが動くのを感じたとき (領 I)
13. 子どもが泣きやまないと (領 I)	14. 私は母と (領 II)
15. 心配なことは (領 II)	16. おっぱいをあげたとき私は (領 I)
17. 夫と私は (領 II)	18. 子どもが生まれて、私のかわったことは (領 II)
19. 性 (領 II)	20. 妊娠に気づいたとき、夫は (領 III)
21. 私が泣きたくなるのは (領 II)	22. 私は母親として (領 I)
23. 私は家にいると (領 II)	

Table 3 IKSとNKSの対応する項目一覧

領域Ⅱ（母親自身のこと）	
I 8 N	心配なことは
I 15 I	心配なことは
I 10 N	私が泣きたくなるのは
I 21 I	私が泣きたくなるのは
領域Ⅲ（父子関係）	
I 7 N	赤ちゃんが生まれて夫の変わったことは
I 10 I	子どもが生まれて夫の変わったことは
I 4 N	はじめて赤ちゃんに会ったとき夫は
I 20 I	妊娠に気づいたとき夫は

註：頭の I は ITEM の I で、数値は項目番号、最後の N または I は NKS または IKS の省略である。なお、説明変数が 2 項目ずつしかないがアイテム・カテゴリ数は 29 以上あるので分析は妥当であると判断した。さらに、I 14 N、I 20 I は質問の意図が異なっているが、初対面ということで分析に加えることにした。

(3) 資料の整理方法

回収した資料は最初に各質問項目ごとに相対的に頻出した回答を抜きだして原文の意図から外れないように要約してそれを再度 coding する為の coding category とした。Table 6 および 9 で示したものが coding category の一例になるので参照されたい（各反応 category の前の数値は category code number である）。そしてこの category に従って各反応を coding しておいた。この coding 資料を分析した。

なお、この code には下記に述べるような反応の有無に関係なく各項目に共通の category code が設定されている。それは Rej.（回答拒否）、Fail（回答失敗）、特異反応、その他、O-P（Other-Positive）、O-N（Other-Negative）の 6 種類である。Rej. とはある項目に対して未回答であった際に、Fail（回答失敗）とはある項目から最後の項目まで未回答であったときに coding した。また特異反応とは心理臨床の上で注目されるような強い負の情緒的回答に、その他とは coding category としてはまとめていく少数でしかも neutral な回答に coding した。さらに、O-P とは頻度の極めて少ない positive な反応に、O-N とは同様に頻度の少ない negative な反応に code 化するものをいう。

3. 結果と考察

(1) NKS と IKS の category の相違について

NKS を実施してから産後 9 ヶ月経った時点で行った IKS では同一の質問であっても領域によってはその回答にはかなりの違いがある（Table 6 並びに 9 参照）。

たとえば、領域Ⅱでは「心配なことは」にNKSの段階では反応 category のほとんどが出産したばかりの新生児に関するものである。しかし、IKSでは自分を含めた家族の健康や将来への懸念にも関心があり乳児とは限らない。このことは産褥直後に比べて産後9ヶ月を迎えたころには育児にそれほどの心配を感じていない、精神的には安定した状態にあるものと推測できる。

さらに、「私が泣きたくなるのは」ではNKSは新生児の泣き、授乳に困惑した様子が伺えるのに対して、IKSでは子どもの心身の状態への反応や特にないという回答が中心的である。

さらに、領域ⅢではNKSとIKSとの category に基本的な差はない。例えば、「赤ちゃん（子ども）が生まれて夫の変ったことは」ではNKSでもIKSでもほぼ父親の自覚、妻や家庭への配慮や協力となっている。この両領域の相違は領域Ⅱが自分自身のことであり、Ⅲが夫とはいえ他人の意識を察することなのであるから当然のことといえよう。

(2) 出産経験を外的基準とした判別分析

出産経験を判別の為の外的基準とし、各項目を説明変数として各領域ごとに数量化第Ⅱ類を実施した結果について以下述べたい。

① 領域Ⅱ「母親自身のこと」

a. NKSについて

分析の精度を示す相関比は0.351で十分な数値である。初産群と経産群の判別率は約79%であった。この各群の sample score の平均をTable 4に、category rangeと偏相関をTable 5に示した。これによると初産群は正の値を、経産群は負の値をとることが分かる。Table 6には各項目の category を score の正から負に従って並びかえたものを示した。

Table 4 〔領域Ⅱ母親自身のこと〕NKSとIKSのサンプル・スコアの平均とSD

	人数	NKS	IKS
初産群	63	0.602 (0.678)	0.427 (0.902)
経産群	65	-0.583 (0.912)	-0.414 (0.912)

註：()内SD

Table 5 〔領域Ⅱ母親自身のこと〕NKSとIKSのカテゴリ・レンジと偏相関

NKSの項目	レンジ	偏相関	IKSの項目	レンジ	偏相関
I8 心配なことは	3.284	0.531	I15 心配なことは	2.919	0.362
I10 私が泣きたくなるのは	3.128	0.386	I21 私が泣きたくなるのは	3.140	0.273

Table 6 「領域Ⅱ母親自身のこと」NKSとIKS対応する項目のカテゴリ・スコア
(スコアを正の値からソート)

NKSの項目とカテゴリ・スコア		IKSの項目とカテゴリ・スコア	
心配なことは ITEM 8 - NKS		心配なことは ITEM15 - IKS	
16 O-P	1.582	6 子どもの健康や体のこと	1.415
17 O-N	1.367	9 O-P	-0.076
14 赤ちゃんに付いての心配	0.878	7 自分や夫や親の健康	-0.077
11 退院後にきちんと世話ができるか	0.748	8 特にない	-0.092
12 育児一般	0.715	10 O-N	-0.119
5 健康に育つかどうか	0.412	5 どの様に成長するか, 将来への懸念	-0.363
7 黄疸, 体重のこと	0.179	4 その他	-1.504
4 その他	-0.449		
6 母乳が出ない	-0.498		
15 特にない	-0.967		
9 上の子どもとの関係	-1.663		
8 小奇形など	-1.751		
NKSの項目とカテゴリ・スコア		IKSの項目とカテゴリ・スコア	
私が泣きたくなるのは ITEM10-NKS		私が泣きたくなるのは ITEM21-IKS	
20 O-P	1.757	12 O-P	1.017
7 泣きやまないとき	0.855	3 特異反応	0.849
21 O-N	0.394	10 自分の体調や疲労	0.582
5 何をしても泣きやまないとき	0.233	7 夫のことで(自分勝手など)	0.536
6 原因が分からず泣くとき	0.190	6 子どもが泣きやまないとき	0.382
15 自分の身体の不調	0.186	13 O-N	0.135
4 その他	0.174	5 子どもが病気のとき	-0.184
8 夜泣き	0.151	9 子どもを叱ったりなど	-0.488
9 夜寝てくれない	0.123	11 特にない	-0.519
19 とくにない	0.006	4 その他	-0.901
11 おっぱいが出ない	-1.012	8 TV, 映画など	-1.167
14 夫のことば	-0.106	1 REJ.	-2.123
12 おっぱいをうまく吸ってくれない	-0.161		
16 幸い	-0.275		
1 REJ.	-0.330		
10 夜の授乳	-0.346		
17 黄疸の治療で	-0.502		
18 上の子どもとのことで	-0.553		
13 子どもの病気	-1.372		

この表からI8「心配なことは」では初産群は育児や赤ちゃんの健康などに深い憂慮を抱いていることと、経産群は上子との関係、母乳が出ないことへの懸念を抱いているか、または特に心配はないが主たる反応であると読みとれる。

I10「私が泣きたくなるのは」では初産群は乳児の泣きに伴う事柄がそのほとんどを占めている。新生児の泣きに強度の不安がかき立てられている様子が認められる。経産群は授乳や、夫や上子と

の関わり、病気・健康などが主な反応であった。

これをまとめると、初産群は生まれたばかりの赤ちゃんの取り扱い、養育方法や健康をめぐっての懸念である。対して経産群は新生児の栄養（哺乳）に、また、夫や上子との関係に不安を感じているが、養育にはそれほどの心配はしていないといえる。

この初産群の反応は新米の母親としてのとまどいが率直に表明されたものといえよう。経産群は乳児の泣きには経験的に対応しうるばかりでなく、それなりの覚悟があると推測される。その為に情緒的な混乱が生じにくいのであろう。さらに、例えば出産経験者の大多数は妊娠から出産、産褥期、乳児期といったその間に生じるさまざまな課題を無事に乗り越えてきたことによる自信があり、養育への懸念があまり表面化しなかったのだろう。逆にいえば経産でありながら新生児への不安や恐れが強いとするならば、以前の出産体験、養育体験に何等かの問題が生じていたと推測される。したがって、経産婦の場合でも以前の出産・養育経験に問題がなかったかどうかを妊娠期間中に把握する必要がある。もし、問題があれば妊娠期からの心理面接などによる care が考慮されなくてはならないだろう。

これに対して初産群は初めての出産を終えたばかりであり、今後どのようなことが起きてくるのかほとんど予期できない状況にある。それが現在の児の状態とも相まって恐れや不安を惹起する要因になったといえよう。従って初産の母親に対してはこれからの育児・養育へのアドバイスを通じての follow - up の態勢が母子保健上必要となる。

b. IKSについて

相関比は 0.362 で NKS よりも低下している。ただし、分析には差し支えない。判別率は NKS と比べて約 79% から約 67% へ下がっている。これは新生児期から生後 9 ヶ月期に至ると出産経験の有無による影響が低下することを意味する。この理由については領域Ⅲでも同じ傾向が認められるので後でまとめて考察したい。

判別比が低いので分析にあまり意味はないが（Table 6 を参照）NKS との比較のために分析する。

I 15 「心配なことは」では初産群は子どもを含めて自身、親、夫の健康を気遣うもので家族の健康に最大の配慮を払っているといえる。経産群では子どもの将来、おそらくは上子に関する将来への気がかりではないかと推測できる。

I 21 「私が泣きたくなるのは」は初産群では自己の体調や夫との関係、子どもが泣きやまないとき、慣れない育児と夫の無理解などが中心である。経産群は子どもとの関係、これも上記と同様に上子に関することや、特にないである。上子との間で特に問題があるかないかがこの項目への回答の差になって現れるということになる。

以上から次のようにいえる。初産群は子どもを含めた家族の健康や自己の体調に懸念がある。経産群は上子との関わり、行く末のことに心配があるか、特にないかである。

この両群の相違は出産経験の有無によるというよりも、既に上子がいるかいないかの違いであるとみた方がより妥当である。経産群の場合では、今回生まれてきた子どもへの懸念のみならず上子への配慮が十分に伺える内容といえるであろう。これは、9 ヶ月となった児と上子との葛藤への配

慮とみることができる。

② 領域Ⅲ「父子関係」

a. NKSのⅡ類について

相関比は0.513で十分な分析精度が得られた。判別率はおよそ80%を示し、かなり判別されているとよい。各群のsample scoreの平均と標準偏差をTable 8に示した。経産群は負の、初産群は正のscoreにそれぞれ負荷している。偏相関、score rangeはTable 7に示した。

Table 7 〔領域Ⅲ父子関係〕NKSとIKSのカテゴリ・レンジと偏相関

NKSの項目	レンジ	偏相関	IKSの項目	レンジ	偏相関
I 7 赤ちゃんが生まれて夫の変わったことは	2.157	0.608	I 10 子どもが生まれて夫の変わったところ	2.321	0.238
I 4 はじめて赤ちゃんに会ったとき、夫は	2.722	0.592	I 20 妊娠に気づいたとき夫は	3.437	0.434

Table 8 〔領域Ⅲ父子関係〕NKSとIKSのサンプル・スコアの平均とSD

	人数	NKS	IKS
初産群	63	0.727 (0.793)	0.485 (0.666)
経産群	65	-0.705 (0.592)	-0.462 (1.046)

註：()内SD

まず、偏相関の大きい17N「赤ちゃんが生まれて夫の変わったことは」について各群の特徴をみていきたい。

初産群はO-N, REJ. が中核でこれは出産後せいぜい約7日間にほんの数時間新生児と面会する程度のことであり新生児をどの程度心理的に受容できているか疑問であることと、妻にしても夫と毎日面会したとしてもその変化を捉えるまでには至っていないことが原因と思われる。

経産群では「特にない」として夫の変化を感じないか、上子の面倒をよくみてくれたり、協力的であったりということで、何もしないか協力的かで二分されているといえる。この協力的ということにしてもいまだ入院中なのであるから夫の変化を短時日のうちに捉えられるものではなく、上子を連れて面会に来院する姿を見たり、留守家庭を預かっている様子を聞いたり、といったことからの回答ではないかと推測される。

つぎに14N「はじめて赤ちゃんに会ったとき夫は」で初産群は極めて強い正の情緒的反応（感激）などが顕著であるのに対して経産群ではわりと冷静、客観的に新生児を迎えていて、両群の相違が明瞭である。

以上、NKSでの父子関係は初産群では夫の変化を十分に感じ取れないが、赤ちゃんと対面したときの夫の強いpositiveな感情体験は十分に理解し得たということである。他方、経産群では夫の変化は認めがたいか、または協力的であるかに二分される。それと同時に赤ちゃんとの対面も冷静に受容できている様子が認められる。この夫側の相違はやはり妻の出産経験の有無というよりも、子どもを育てる体験を夫がしてきたか否かの違いであると考えられる。

Table 9 〔領域Ⅲ父子関係〕NKSとIKS対応する項目のカテゴリ・スコア
(スコアを正の値からソート)

NKSの項目とカテゴリ・スコア		IKSの項目とカテゴリ・スコア		
はじめて赤ちゃんに会ったとき夫は ITEM4 - NKS		妊娠に気づいたとき夫は ITEM20 - IKS		
17	まだ実感がない	1.434	11 O-P	1.286
9	～に似て喜んだ	1.357	8 信じられないようす	1.048
12	可愛いといった(手や足を含む)	1.348	5 喜んだ	0.342
13	照れくさそう	0.837	12 O-N	0.197
6	感激	0.800	10 頑張りなさい励まされた	0.097
16	不思議そう	0.822	6 うれしそうだった	-0.021
19	とまどい	0.805	7 男の子(女の子)が欲しい	-1.770
20	身体の大小	0.278	9 変化ない	-2.007
5	うれしそう	0.080	4 その他	-2.150
14	笑っていた	0.011		
22	O-P	-0.073		
23	O-N	-0.135		
4	その他	-0.887		
11	誰それの方が可愛い	-0.631		
18	赤ちゃんをじっと見ている	-0.835		
8	～に似ている	-0.910		
3	特異反応	-1.080		
1	REJ.	-1.246		
7	喜んだ	-1.288		
NKSの項目とカテゴリ・スコア		IKSの項目とカテゴリ・スコア		
赤ちゃんが生まれて夫の変ったことは ITEM7 - NKS		子どもが生まれて夫の変ったことは ITEM10 - IKS		
10	たくましくなった	1.339	3 特異反応	1.822
12	仕事熱心	1.339	11 O-P	1.350
13	分からない	1.140	4 その他	1.243
9	父親の自覚	1.064	12 O-N	0.492
16	O-N	0.733	6 性格+方向へ変化(優しくなど)	0.278
1	REJ.	0.724	9 親としての責任感	0.260
6	いたわる	0.261	5 家庭的に	0.104
11	子どもへの関心がでてきた	-0.025	7 子ども好きに	0.093
15	O-P	-0.140	8 子どもの面倒をみてくれる	-0.286
5	優しくなった	-0.184	10 特にない	-0.499
4	その他	-0.465		
8	協力的に	-0.501		
14	特にない	-0.744		
7	子どもの面倒をみてくれる	-0.818		

b. IKSについて

相関比は0.224でNKSと比較して低いが分析は可能である。判別率は約65%であって初・経産の両群はほとんど判別されないといってよい。これも領域Ⅱの場合と同じで新生児期から乳児期に移行することで出産回数効果が薄れることを意味している。数値的にはほとんど判別されてい

ないのでこれ以上の分析はあまり意味がないのであるが、NKSとの対比を考えるために一応の分析を試みたい。

各群の sample score の平均などは Table 8 に示すとおりである。初産群は正、経産群は負の値をとる。これに従って category score からの各群の特徴をみたい (Table 9 参照)。

偏相関の大きい I 20 I 「妊娠に気づいたとき夫は」では初産群は喜びが中心であり、経産群では中心となる反応が認められないが極端な値からみれば生まれてくる児の性の好みといったもので情緒的な反応は感じられない。

I 10 「子どもが生まれて夫の変わったことは」では初産群は 0-N, 性格のよい方向への変化であり、経産群は特にない、上子の面倒をみるといったものである。

この2つの項目から経産群の夫は妻の妊娠には冷静であり、子どもが産まれても変化がないか上子の面倒をみるといったことで新生児への反応は中心的ではない。

それに比べて初産群の夫は妻の妊娠を喜びをもって迎え、新生児の誕生に大きな期待を寄せていることが分かる。この両群の相違は第1子と第2子以降の子どもをどのような意識・感情で家族の一員として迎え入れたかを意味している。したがって、出生順位による子どもの性格づけや、きょうだい、親子関係を形成していく上での基本的な要因となるものと考えられる。ただし、これは妻がみた夫の姿であってこれをもって夫の意識であると見なすことは危険である。

ところで、領域 II, III で共通していえることは新生児期と産後9ヶ月を比較すると判別率が IKS 段階で低下してしまい、出産経験の有無が回答に影響をもたらさなくなるということである。これについて以下若干の考察をしたい。

出産経験の効果は上で何度か述べてきたように新生児期から乳児期に移行するに従って低下する。これは以前に筆者が報告した母子関係に関する質問項目で同様の分析を試みたところ、NKS 段階での群間の判別比は約 80% であり、IKS の段階でも約 76% であった。この結果は、母子関係に関する限りでは出産経験の有無による効果は薄れることなく、新生児期から少なくとも生後9ヶ月までは持続するということである。このことから出産経験の効果は母親自身の懸念や夫側の児への意識といった側面ではあまりないということになる。この相違は母子関係に関わる領域の場合では上子への育児・養育体験の有無が影響するということができよう。

今後の課題

- (1) 出産経験が新生児期の母親自身のことや、父子関係に影響を与えていることが分かった。しかし、NKS と IKS の項目間の対応を得ようとしたために、選択した項目が少数になってしまった。そのために母親自身の内容も自身の不安や悲哀に偏り過ぎたなどの問題があったし、父子関係では項目間の対応が不十分にならざるを得ない面も出てきた。こうした点を配慮した上で領域全体を説明変数とした再度の分析を試みる必要がある。
- (2) それと同時に、妊娠期から生後9ヶ月までを、つまり、SCT- PKS から、NKS, IKS までの縦断的資料を収集してその間の母親の意識の変化を追跡したい。

- (3) 今回の分析で母親自身のことや父子関係では出産経験の有無は新生児期から乳児期へと移行するとその効果が薄れることが分かった。このことは初産の母親であっても育児経験を重ねていくに連れて当初の不安から解放されることを意味している。
- (4) しかし、他方では母子関係領域では出産経験の効果は認められている。この相違が、たんに説明変数の多少によるか、意味内容の相違に基づくのかはもう少し、例数を増やした再度の検討に委ねたい。
- (5) さらに、父子関係は妻の出産経験よりも、子どものあるなしの影響の方が大きいと示唆された。そこで今後子どもの人数と父子関係との関連を明らかにする必要がある。
- (6) それと同時に、妻側からみたのでは不十分なので父親自身にも回答してもらうようにしてその対応関係を検討したい。

附 記：

1. 検査にご協力下さった皆様、並びに検査実施に多大なご協力を下さった都立母子保健院の関係各位に謝意を表したいと思えます。
2. 本研究は厚生省の心身障害児研究「母子相互作用」研究班（班長：小林 登）の研究費によるものである。
3. 本研究の資料の収集ならびに分析にご協力下さった東京大学母子保健学教室の小林臻先生、飯島久美子氏に謝意を表します。
4. 本研究の計算は名古屋大学大型計算機センターで行った（FACOM ANALYST）。

参 考 文 献

- 1) Gard, R.R., et al 1986 A Multivariate Investigation of Postpartum Mood Disturbance *Brit. J. Psychiat.* 148, Pp. 567-575.
- 2) 鳩谷 龍 1977 産褥期の精神障害 *臨床精神医学* 6(4) Pp. 493-500
- 3) 川井 尚ほか 1982 妊娠期の母子関係～妊婦用文章完成法検査（SCT-PKS）の作成～乳児発達研究会発表論文集 第4号 Pp. 47-50
- 4) 川井 尚ほか 1986 新生児期の母子関係(1)－初産，経産，母親の年齢によるSCT-NKSの検討－ 第33回日本小児保健学会講演集 F 28
- 5) 池本桂子ほか 1986 いわゆるマタニティブルーの調査－その1. 出現頻度と臨床像－ *精神医学* 28(9) Pp. 1011-1018
- 6) マーケティング・サイエンス研究会編 1974 マーケティング調査 有斐閣
- 7) 岡野禎治ほか 1986 産後精神病の臨床統計的研究 *精神医学* 28 Pp. 505-512
- 8) Pitt, B. 1973 'Maternity Blue' *Brit. J. Psychiat.* 122, Pp. 431-433
- 9) 庄司順一ほか 1983 妊娠初期の母子関係(2)～妊婦用文章完成法検査（SCT-PKS）の改訂と男性版の作成～ 乳児発達研究会発表論文集 第5号 Pp. 44-47

- 10) 庄司順一ほか 1986 乳児期の母子関係(1)－SCT－IKSの概要－ 第33回日本小児保健学会講演集 F 30
- 11) 周産期医学編集委員会編 1983 母子相互作用 周産期医学 臨時増刊号 13巻 12号
- 12) 周産期医学編集委員会編 1986 特集/マタニティー・ブルーをめぐって 周産期医学 16巻3号
- 13) 恒次欽也ほか 1984 妊娠期の母子関係(3)～妊婦用文章完成法検査の数量化第Ⅱ類・Ⅲ類による統計的分析～ 乳児発達研究会発表論文集 第6号 Pp. 18-26
- 14) 恒次欽也ほか 1985 妊娠期の母子関係(5)～SCT－PKS男性版の数量化第Ⅱ類・Ⅲ類による統計的分析～ 乳児発達研究会発表論文集 第7号 Pp. 7-14
- 15) 恒次欽也ほか 1986 a 妊娠期の母子関係(6)～SCT－PKS男性版の数量化第Ⅱ類による妻の妊娠回数統計的分析～ 乳児発達研究 第8号 Pp. 1-6
- 16) 恒次欽也ほか 1986 b 乳児期の母子関係(2)～SCT－IKSの数量化第Ⅱ類による検討～ 第33回日本小児保健学会講演集 F 31
- 17) 恒次欽也ほか 1986 c 妊婦用文章完成法検査(SCT－PKS)による妊娠期からの母子関係(1)－その概要と統計的分析から－ 愛知教育大学研究報告第35輯(教育科学) Pp. 235-247
- 18) 恒次欽也ほか 1987 新生児期・乳児期用文章完成法検査(SCTNKs・IKS)による母子関係(1)－その概要と統計的分析から－ 愛知教育大学研究報告第36輯(教育科学) Pp. 181-190

(昭和62年3月20受理)